

SUPER MYSTERY
MAGAZINE
MU

世界の謎と不思議に
挑戦する

5月
No.306

2006年5月1日発行 / 毎月1回1日発行
第28巻第5号
昭和57年3月10日 / 第3種郵便物認可



UFO | 超能力 | UMA
奇現象 | 古代文明
神秘 | スピリチュアル

完全解明!!
ダ・ヴィンチ・コードの謎

総力特集
絵画に隠された禁断の秘義
「キリストの血脈」に迫る!!



●2色刷り特集
謎の構造物がひしめく土星の衛星
イアペタスは人工天体だった!!

封印された神道 異端の神々

水竜UMA「メコン・ナーガ」

秘史 レイキが日本を救った!!

気象兵器最前線

意志をもった火の玉
ヘスダーレンの怪光

特別
とじ込み
付録

心と体を変える
「ラージャ・ヨガ」!!

神聖
梵字ヤントラ

定価
650yen
(税込)

◎超常現象レポート◎ 文〓並木伸一郎

意志をもった火の玉が
空中を乱舞する!!



↑1982年3月、ヘスダーレンの上空に出現した怪光。突然空中に現れ、分裂した。

ヘスダーレンの 怪光は プラズマ生命体か!?

©Project Hessdalen

ノルウェー中部のヘスダーレンという村に、不思議な光が現れるという。

研究者によって観測・撮影された写真を見ると、
光る物体はさまざまな形や動きをしていることがわかる。
この怪光の正体は何なのだろう。

突然上空に現れ 動きまわる怪光

ヘスダーレンはノルウェー中部に位置する小さな村だ。人口もまばらなこの溪谷地帯で、正体も実態も不明な謎の発光体が1981年を境に頻々と出現している。

通称「ヘスダーレン・ライト」と呼ばれるこの怪光は、突然空中に出現し

たかと思うと1時間以上も滞空したり、分裂したり、あるいはまた、ゆっくりと動きまわったかと思うと、猛スピードで飛び去ってしまうのだ。

怪光はかなり小型で、球形もしくは砲弾状をしており、黄白色で、ときおり上部や下部が赤く大きく輝いたときでも飛行機の着陸灯程度の大きさであるといわれる。

怪光は村人たちによって初めてその存在が知られ、やがて研究家によって観察が始められた。すると、彼ら等待っていたかのように、怪光はその不思議な姿を現した。

怪光の目撃があいつぐなか、ノルウェーとスウェーデン両国の科学者は、これを自然現象だとして無視したが、この怪光現象を重視した民間のUFO研究団体「UFOノルウェー」と「UFOスウェーデン」の両グループが、1982年2月、共同で観測基地を設



↑2003年1月に撮影された怪光。怪光は小型で、球形が砲弾状になっている。



↑さまざまな形に変化する怪光。まるで意志をもっているかのようだ。

→1982年10月、ヘスターレンの南側の山の上空に現れた怪光。ふたつに分裂している。

↓ふたつに分裂した怪光の拡大写真。この正体はいったい何なのか？



営し、科学者や物理学者を含むスタッフたちにより、以後、昼夜にわたる観測が実施された。噂どおり、謎の発光体は何度となく彼らの前に出現し、その赤く脈動する姿が次々と撮影された。その動きは科学者たちを驚嘆させた。というのも、怪光はまるでヨーヨーのように上下したり、急停止や急旋回をいとも簡単に演じてみせたのである。しかもこれは、単なる光学的な現象ではなかった。

発光体が出現すると磁気に動的変化が計測され、さらに光体にレーザー光線が放射されると、それに応えるかのよう定期的にフラッシュしながら移動していったのだ！

予期せぬ出来事に観測基地の一同は色めきたった。しかも、これが偶然ではない証拠に、その後、4度実施されたレーザー照射テストでも、光体はそのつど規則的にフラッシュしたのである。

「この光体は知性を秘めている！」と、スタッフのだれもが思った。

本格的な科学調査が実施された

そこで、1984年に、「プロジェクト・ヘスターレン」と名づけられた観測チームが結成され、ノルウェー人科学者エーリング・ストランド教授を



リーダーに本格的な調査が開始された。観測所内には、白黒暗視ビデオカメラ、距離測定のためのカラービデオカメラ2台、ズーム望遠レンズ、データ記録用ビデオ、コンピュータ。さらに電磁場変動観測装置や気象観測装置（風向・風力・温度・気圧）などが連動するという本格的な観測システムが装備されていた。

そして同年2月26日午前3時8分すぎ、ヘスターレンの南に位置するヘルスヨエン湖の丘陵地帯東面に光球が出

現。ビヨルン・ラーゲセンら3人によって観測され、写真に撮られた。突如、出現した怪光は一度消えたが、しばらくすると再び出現し、彼らを照らすかのように明るく輝き、次にはゆっくりと半円を描くように角度を変え、約3分後には消えてしまった。

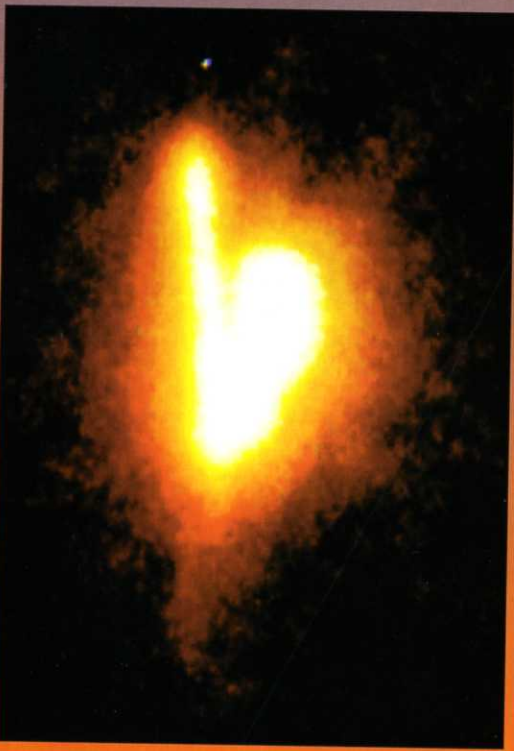
同プロジェクトでは、目撃された光体の奇妙をF1〜F10という基準で区別している。

F1は自然現象として説明できるもの。そしてF10は、科学的な説明がい

っさいつけられないものを意味する。だいたいヘスターレン現象と自然現象との境界線は、F4〜F5ということになるが、このとき出現した怪光はF5と判定された。

怪光の大きさは、フィルムの画面上で、高さが1・25ミリで捉えられていた。カメラには50ミリレンズが装着されていたので、カメラと光体との角度は1・432度となり、これが山の上に出現していたことが判明。

コンピュータによって色相による



↑観測基地の前方に出現した怪光。1984年撮影。
←50ミリレンズで撮影された怪光。フィルムの画面上で、黄色い部分の高さが1.25ミリだった。

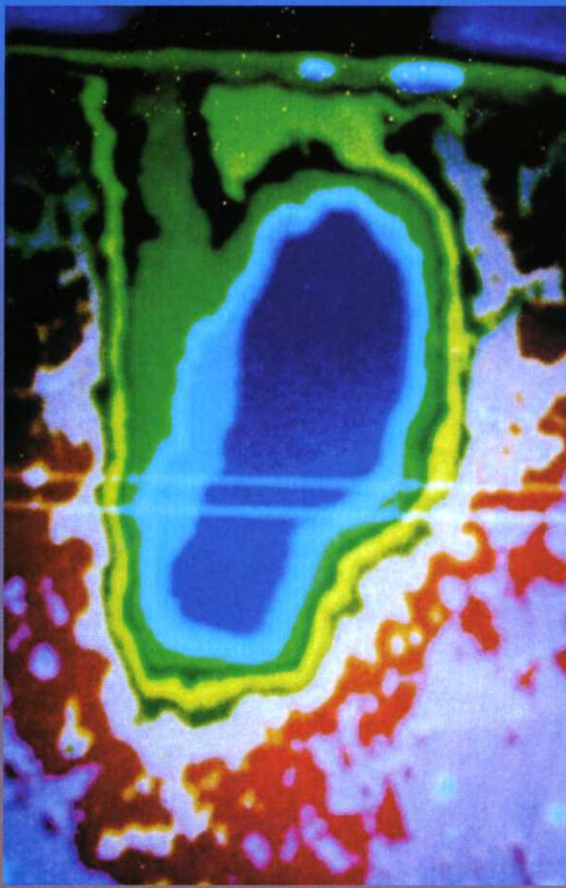
**怪光は意志をもった
プラズマ生命体か!?**

そして2000年8月と2001年8月、イタリアの科学プロジェクトによって立ち上げられた怪光調査プロジェクト「EMBLA」が、現地で観測を実施した。

宇宙物理学者マッシモ・テオドラ

輪郭の違いや輪郭が強調された。ちなみに、スペクトル分析では、可視スペクトル430ナノメートル〜710ナノメートルという数値が得られている。

その後も観測が続けられ写真も撮られたが、一時中断。1998年に再開され、このとき初めて怪光の姿がビデオ撮影されたのである。



二博士の指揮で、捕捉された怪光の電磁波スペクトル分析、写真やビデオ映像に対する分光分析などが行われ、豊富なデータが収集された。

この2度にわたる観測調査で驚くべき事実が次々とわかった。まず光体が、形や大きさを変えても温度が一定だったことから自ら熱を発生していることがわかった。それも常識を超えた高熱を発生していたのだ。なぜなら、測定されたその温度は絶対温度で6500度K。

↑写真を分析した結果、形や大きさが変わっても温度は一定であることがわかった。これは光体が自ら熱を発生していることを示している。
 ←光体の色相分布。光体は自ら高温を発生する熱プラズマだった。

これは太陽の表面温度よりも高い数値なのである。

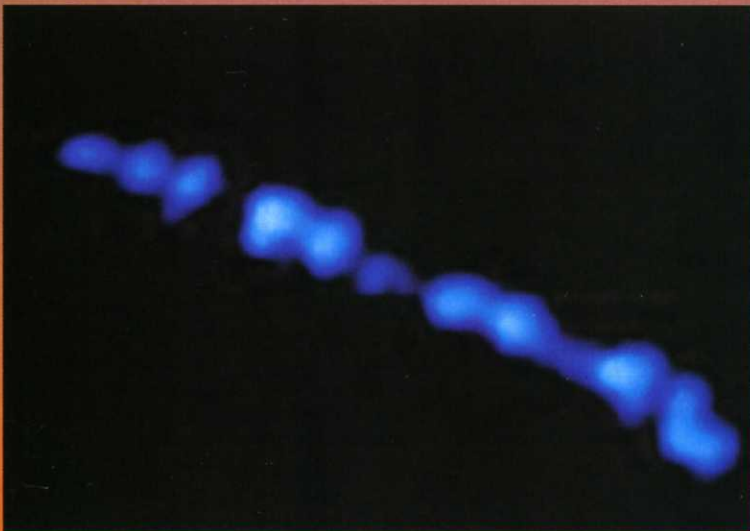
ついで、分光分析と光の波長を調べた際、熱プラズマに典型的なイオンと電子の組み合わせが見とれた。その結果、記録された怪光の95パーセントが熱プラズマだと判定されたのである。さらに、ビデオ映像からの解析で、怪光の実体が無数の小さな光球が密集したものであること、その光球が分裂するかのよう放出されていることもわかった。

「ヘスダレーンの怪光は熱と長波を発生する高エネルギーのプラズマだ」とビデオラー二博士は語る。

しかし、地球上ではこれほど熱を発生するプラズマなど存在しない。そのメカニズムは、現存の科学では理解できないものだという。

ヘスダレーン溪谷に科学の概念を覆すような特質をもった熱プラズマが出現しているのは、もはや間違いのない事実だ。

↓怪光は無数の小さな光球が密集したもので、熱と長波を発生する高エネルギーのプラズマであることはわかったが、そのメカニズムは現代の科学では説明できない。



問題は、それがいかに形成され、どうして意志をもっているかのようふるまうのかという点にある。

ひよっとすると、怪光の正体は、かねてから噂されるプラズマ生命体なのかもしれない。

本格的な観測は2003年で中断しているが、近々、観測プロジェクトが再開されるといふ。早く再開され、新たな科学的なデータが公開されることを期待したい。

